

財務省茶番劇

多くの人がまだ気がついていませんが、国民が節約してコソコソと貯めたお金を銀行に預けると、驚くべきことにその半分しか帰ってこないことが目前です。

このように言くと、「そんなことはない」という反撃が聞こえそうです。

かつて日本人はお上を尊敬しつつも、良い意味での批判精神や、「ひやかす余裕」

(有)西川経営オフィスサービス

中村会計

事務所便り

2011年7月29日 (金) NO. 214

地域から明るい未来を作ろう

があったが、最近補助金などが行き渡った関係で、「建前」に疑問を示す人を「村八分」にするという社会の風潮が増している。

確かに、見かけ上は、銀行に百万円預けて、しばらくして銀行に下ろしに行くと今は、ちゃんと百万円をおろすことができます。

おまけに、1年でも預けておくと、わずかに千円の利子も付いてきます。

だから、預金した人は百万円は戻ってくるような錯覚にとらわれています。これは典型的な「詐欺師」の手口です。

銀行に百万円預けると、かつては銀行は企業に貸し出して、百万円を120万円で返して貰い(「運用」という)、手数料を15万円とって、預金者には利子5万円をつけ、合計で105万円を戻していました。

百万円が120万円になるのは、「正常な企業活動」によって「より価値の高いものや

サービス」を提供し、それによって社会全体は130万円ぐらいの価値を生むので、企業が10万円、銀行が15万円、そして預金者が5万円をとっていたのです。

ここ二十年で社会が衰退し、成長しなくなると企業は事業を拡大できず、会社は自己資金を抱えて銀行からお金を借りなくなりました。

しかし、国民は総資産一千五百兆円(米国が狙う)といわれるお金を持っているので、当然に国内の銀行な

かけた電話は先に切るな。

勝負はすでに始まっている。

最近読んだ本の中に、自分が簡単にできる仕事は、他の人も簡単にできる。そこでは差が付かないとある。

万事が「おごる平家

は久しぶらず」、他人を騙し、裏切り富や権力を手に入れるよう悪い思いを抱く者には、最終的に悪い結末が待っている。仏教の世界には「因果応報」という世界があります。

どに預けます。(円高の背景?)

銀行は、企業が借りてくれず、運用益がでないから、必然的に国が出す国債を買うことになる。(我が国の

国債の始まりが戦時国債)今では極普通のことになり、政府は国債を出して、銀行から預金を吸い取り、それを「補助金」や「エコポイント」という形で配り、そのお金は結果的に「政府に帰ってこない」「使い捨て」の補助金になってます。

天は決して見捨てることはありません。

前向きに理想を追求することこそ、人間として正しいと信じる。

ビジネス社会の掟破りに対し

スムーズな仕事は疑え

て、掟を守らない代償は実は余りにも大きいと胸に刻んでいたほうが良い。

利益を得るにも正しい道を踏まなければならない。不正な振る舞いで利益を求めてはいけな

だから、銀行が国債を政府に売ると、政府はそのお金を税金で払うということになる。それ以外に払う「財源」が無いからです。

政府が勝手に使いまくり、足りなくなると消費税や所得税、震災復興税等で勝手に増税するという、今ではとんでもないことになっているのです。

更に悪いことに政策変更は、敗戦後自民が招いた米(軍)が見事に日本の頸動脈に控えていることです。

い。

競争社会において、勝つために権謀術数の限りを尽くし、欺き勝ち抜くもの、弱肉強食のビジネス世界で、甘いことを言っ

いたら厳しい社会に勝てない。と言う方がおおいでます。しかし「利を求む

そんな会社は決して永く続かないものだ。

